

谷川俊太郎全詩集の研究（2）

大阪芸術大学 文芸学科 教授 山田 兼士

- (1) 福永武彦の詩学（単著）水声社、2019、10、30
- (2) 谷川俊太郎全《詩集》を読む（連載第2回） 季刊「びーぐる一詩の海へ」第43号（濤標刊、2019、4、20）
- (3) 谷川俊太郎全《詩集》を読む（連載第3回） 季刊「びーぐる一詩の海へ」第44号（濤標刊、2019、7、20）
- (4) 谷川俊太郎全《詩集》を読む（連載第4回） 季刊「びーぐる一詩の海へ」第45号（濤標刊、2019、10、20）
- (5) 静力学と動力学 小野十三郎から長谷川龍生へ「現代詩手帖」2019年11月号（思潮社、2019、11、1）
- (6) 対論・この詩集を読め（40回）時里二郎『名井島』（細見和之との対談）『びーぐる一詩の海へ』第43号（濤標、2019、4、20）
- (7) フランス歌曲と詩人たち（エッセイ）『芸術人』vol.12（大阪芸術大学通信教育部、2019年7月）
- (8) やまもとあつこ詩集『つきに うたって』（書評）『びーぐる一詩の海へ』第44号（濤標、2019、7、20）
- (9) 野村喜和夫『骨なしオデュッセイア』（書評）『言葉たちは芝居をつづけよ』vol.8
- (10) 岸田将幸『詩の地面 詩の空』（書評）『図書新聞』2019年8月17日号
- (11) 菅原克己の散文詩（エッセイ）『びーぐる一詩の海へ』第45号（濤標、2019、10、20）
- (12) 対論・この詩集を読め（41回）野村喜和夫訳『ルネ・シャール詩集』（細見和之との対談）『びーぐる一詩の海へ』第45号（濤標、2019、10、20）

以上、例年より本数は少ないが、なんといっても本年度は35年間にわたる研究成果として、単行本『福永武彦の詩学』（水声社、2019年10月30日）

を刊行したことが特筆される。青春期の『マチネ・ポエティック』に始まって晩年の大作『死の島』に至る実験と冒険の諸相を一貫した論脈で捉える試みで、すでに週刊「読書人」で書評に取り上げられるなど、斯界の注目を浴びている。なお、本研究は、平成29年度のテーマ「福永武彦論完成に向けて」の具体的実現である。

2019年度においては、「谷川俊太郎全詩集の研究（2）」と称して、おもに第3詩集『62のソネット』（1953年）から第15詩集『定義』（1975年）まで、計13冊の単行本詩集を精読することで、初期から中期にかけての谷川作品の多様性と一貫性を網羅的に解釈した。特に、1975年に刊行された『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』と『定義』は、主題も方法も対象的な詩集でありながら、強靱な志向で結ばれており、これ以後の谷川作品の豊穡さの基盤となった、という意味で画期的なものだった。現在、全部で72冊を数える「全詩集」の中でも、最も特徴的かつ重大な対照が見られる、同年の2冊をめぐっては、これまでも様々な考察が試みられてきたが、これを全詩集の構成原理にまで当てはめた解釈はなく、今後の展開の中でその体系性をさらに探求していくつもりである。